

所 陵

No. 89

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



有孔中空土製品（縄文時代晩期）・（左）長さ10cm

● 目 次 ●

額装された作品(扁額)の修理	藤枝 宏治	2
鉄炮鍛冶屋敷(町家歴史館 井上関右衛門家住宅)		
—日本で唯一の江戸時代の鉄炮鍛冶の作業場兼住居—	北林 千明	5
追われる来訪神	黒田 一充	7
国府遺跡から出土した「刻痕有鹿角器」について(II)	合田 茂伸	10
山岡順太郎宛長塚節書簡の紹介(上)	佐藤 健太郎	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928
<https://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

額装された作品（扁額）の修理

藤 枝 宏 治

はじめに

岸和田の城下に、江戸時代から残る武家屋敷にお住まいの方から、土屋鳳洲（ほうしゅう）の墨書の扁額の修理の依頼を受けました。一般的な修理なので、和額修理の参考になればと手順を紹介します。

此方のお宅には、幕末からの岸和田藩にかかわる人々の掛け軸、額などが多数保存されており、これまでも数点修理してきました。

今回の作者、土屋鳳洲は岸和田藩士の長男として生まれ、岸和田藩の藩校講習館で相馬九方（きゅうほう）に学び、その後講習館の教授になります。維新後は岸和田県が堺県に編入され、堺県師範学校長や奈良師範学校長、華族女学校教授、東洋大学教授などを務め、教育の振興に尽くされたようです。堺市戎之町のご自宅に晩晴書院を開き、漢籍、詩文、修身を教えました。鳳洲の詩文は多く、とき的话题を漢文でうまく表現しています。師の相馬九方は藤澤東咳と深く親交があり、鳳洲もまた藤澤南岳と深く交流した人物であり、泊園書院と少なからずご縁のある人物でした。

なお、「扁額」という名称は、屋外にかけられる木製の額を意味するものですが、私のまわりの表具屋仲間は、室内の鴨居の上にかけられる和額を扁額と呼んでいて、他に呼び名が思いつかないので、今回この名前で紹介します。

1 修理作品の状態

作品寸法

本紙寸法 天地29cm×左右139cm

下地寸法 天地41cm×左右169cm

（１）墨の膠分がなくなり、墨が粉状化して、一部剥落している。

（２）乾燥と何らかの衝撃で亀裂が入り、本紙が欠落している。

（３）下地の組子（くみこ）がゆるんでしまい額がゴソゴソになっている。

2 修理仕様と報告

（１）膠による剥落止め

額の状態まま剥落止めを行うと、膠の水溶液が乾燥する時、亀裂が入る恐れがあるので、解体してから剥落止めを行いたい。しかし墨の状態が悪く、捲（めく）るとき墨（煤）が飛散しそうなので^{（ア）}このまま剥落止めを行った。

筆で膠を塗布するのは不可能なので、スプレーで1.5%の膠を煤が飛ばないように噴霧した。全体に噴霧するので、乾燥時亀裂が入らないよう、台紙（金箔押し）と本紙を切り離しておいた^{（イ）}。

全体に塗布したので灰汁の溜まりはできなかったが、数日後、まだ煤の定着はできていないので、再び膠をスプレーで塗布した。

作品を捲ろうとしたが、煤が面の状態で上がるので筆を用い、2%の膠を塗布した^{（ウ）}。重石をかけないと定着しない^{（エ）}と思えるので、下地の傷み具合を考慮して塗布の後、化繊紙をあて重石を載せ定着した^{（オ）}。

（ア）写真3のように墨の原料である煤が、膠分がなくなったため粉状化して埃が積もったようになっていた。写真1、2の状況は掃除の時、叩きをかけたりして煤を散らしてしまい、衝撃や乾燥で亀裂したようである。このような状態では、息を吹きかけただけでも煤は飛散してしまう。墨で書かれた墨書の跡も膠がなくなること、元の白紙に戻っている。今回、筆で膠を塗布すると煤が全て筆に付いてくるため、とりあえずスプレーで止めることにした。

（イ）乾燥や湿潤を繰り返すたびに本紙が緊張し亀裂が入る。今回のように劣化した状態で水分を全面的に与えるのは良くないが、引っ張られないように周りはずした。

（ウ）煤同士が付いて止まっていたため、筆で撫ぜても付くことはなかった。

（エ）煤と煤は絡まっているが、支持体である本紙には完全には定着していない。下地から解体して、本紙を作業台の上で重石をかけ押さえられれば問題ないが、元の額の状態で重しを載せ押さえるには、重さで破ってしまわないよう注意した。

（オ）近年、水分は透過するが、膠や糊などで接着しない化学繊維ができたので、今回のような剥落止めが

可能になった。重石は鉛の散弾を袋に入れ、大きさと重さを書の大きさに合わせて作り使用した。

(2) 捲り・裏打ち・補彩

本紙の端からヘラ（竹べら）を入れ、台紙が付いた状態で下地から本紙を捲った。

本紙にスプレーで十分に水分を与えた後、レーヨン紙を用いて表打ちした。

数枚の障子紙を水張りした盤板（ばいた・桧材の作業台）上に、表打ちした本紙を乗せて台紙、裏打ち紙を捲った。台紙の鳥の子紙を捲った後、水分を与えて本紙を動かし亀裂部分を元に戻した。

元の肌裏紙はほぼ捲れたが、肌裏紙の劣化が激しく、一部捲れず残した^(カ)。

欠落部分に補修紙を充てて繕った。

古色を付けた美濃紙で肌裏打ちを施し、素干した。

厚めの美濃紙で二度増裏打ちを施し、仮張りした。

補修紙に補彩をした。一部亀裂部分に絵の具で補彩した^(キ)。

(カ) 美濃紙で裏打ちされていたのだろうが、劣化した肌裏紙の繊維をピンセットでつまもうとするがつまめず本紙に傷をつけるので、捲れない元の肌裏紙は少し残すことにした。

(キ) 補修紙の部分に古色を付け、本紙の地色に合わせた。所蔵者からは、墨の剥落部分に補彩をというご依頼であったが、作品の雰囲気が変わると説明し、行わないこととした。亀裂の細い傷の部分には傷が目立つので補彩した。墨では照りが出るので、絵の具を使った。

(3) 下地・台紙・仕上げ

元の下地は劣化して痩せていたので、下地、椽（ふち）を新調した。

下地には、骨縛り、胴張り、蓑かけ、蓑縛りの下張りを施した。途中、釘締（くぎしめ）も行った^(ク)。

台紙は鳥の子紙に砂子を振り、古色を付けた。

泛け（うけ）張りをかけ、表に台紙、裏に花色紙を張った。

全体に水糊と周りに堅糊を付け台紙に本紙を張った^(ケ)。

十分な乾燥の後、前面にアクリル板を入れ仕

上げた。

(ク) 下地は外側四方の框（かまち）と、中の細い組子を木釘で打ち付け、四隅に隅板を入れ作られている。今回下地が大きいので、屏風や襖と同様の下張りをした。6層の下張りであるが、これによって下地の骨組みが締めしっかりした強度を保てた。下張りの仕組みは、骨組みの経年によるくいが表面の本紙に直接影響しないよう考えられたもので、次の泛け張りは本紙が緊張したときに引かれる力が分散するように考えられたものである。

釘締とは糊の水分などで緩みかけた組子を木釘を叩き締める作業である。

(ケ) 小さな作品は全体に水をして廻りに糊を付け張るが、今回作品が大きいので、全面台紙に付いているように水糊で張った。乾燥時、台紙ごと引っ張られ、泛け張りで力が分散されるよう考えた。

おわりに

今回のような、墨が粉状化した額の修理を時々預かる。潮風の当たる風通しの良いところに掛けられていた額にはよくあると聞いたが、そればかりではなさそうだ。

昔、海外へ流失した文化財になるような古い掛け軸を、展示しやすいように軸装から額装に表装し直したところ、作品の劣化が進み、再び軸装に戻しているという話を聞いたことがある。絵具、墨、支持体である紙、絹、いろいろな劣化が考えられるが、日本のように湿度が比較的高いところと、欧米のような乾燥したところでは、保存の方法は変わってくると思う。

墨の話では、或る書家との会話の中で、古い墨は少し膠を足して使った方がいい場合があり、中国の名墨もそうして使っていると聞いたことがある。

修理に使う膠の話になるが、つい最近までは、牛膠（三千本、粒膠）、鹿膠、ウサギ膠等が主なものであったが、最近では同じ牛皮の膠でも、部位、抽出方法（時間、温度）など、いろいろ研究されて、接着力の強い膠や浸透性のある膠、透明感があり色を汚さない膠が製造されている。

肌裏打ちに使われる紙について考えると、やはりしっかりした薄口の美濃紙で裏打ちされた作品は、安全に美しく修理できる。安価な紙で裏打ちされたものは、捲るとき作品を傷つける恐れがあり、また捲れないまま裏打ちを重ねることとなると、将来的に作品の欠

落を招いてしまう。

今回、亀裂が入った原因は経年劣化によるもので間違いはないが、写真1にみられるように、本紙は周りの糊だけで張られており、台紙や泛け紙（うけがみ）と全面接着されていなかった。これだけ大きな本紙は水糊で全面張り付けた方が、引っ張られる力が分散してよいと思う。

仕上げにアクリル板を入れると、鑑賞に少し障害が出るが、衝撃による破損対策だけでな

く、本紙、絵具、墨、などの劣化防止には必要だろうと思う。

【参考】「明治の教育界に足跡を残した土屋弘（つちやひろし）」『ミニ岸和田再発見第18弾』（岸和田市立図書館）
<https://www.city.kishiwada.osaka.jp/site/toshokan/mini-18.html>（2024年8月30日閲覧）

藤枝春月 代表

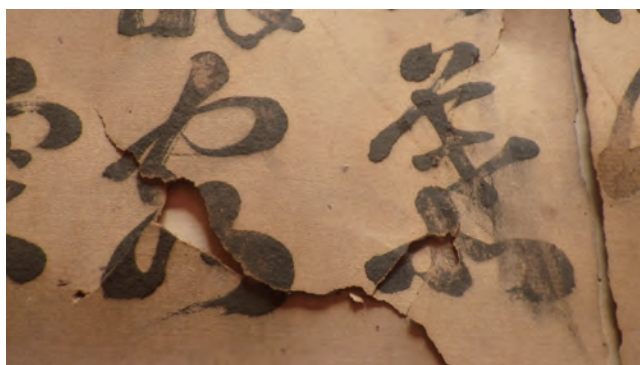


写真1 修理前 (1)

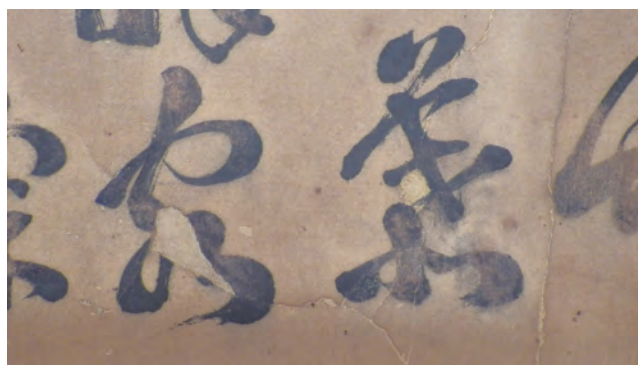


写真4 修理後 (1)

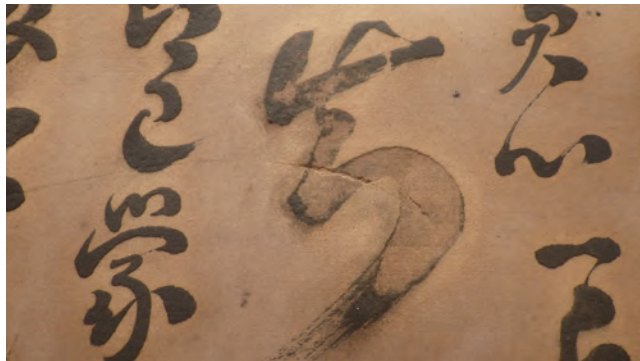


写真2 修理前 (2)

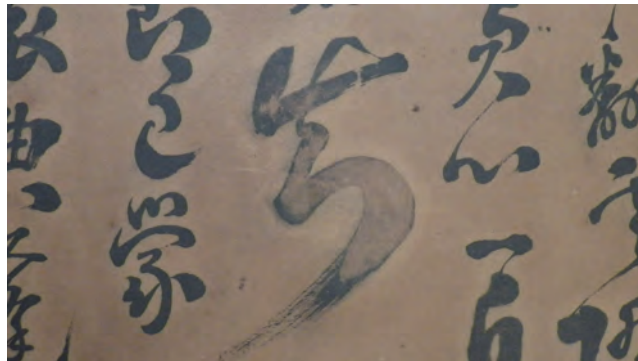


写真5 修理後 (2)



写真3 修理前 (3)



写真6 修理後 (3)

鉄炮鍛冶屋敷（町家歴史館 井上関右衛門家住宅）

—日本で唯一の江戸時代の鉄炮鍛冶の作業場兼住居—

北 林 千 明

1 鉄炮伝来と堺

天文12年（1543）、ポルトガル人が種子島にもたらした鉄炮は、その後堺等で大量生産され、戦国時代の新兵器として戦術に大きな影響を与えました。江戸時代に入ってから、堺では鉄炮製造が続きました。

大阪府内で唯一残る路面電車、阪堺電車に乗って大阪市内から大和川を渡った高須神社停留場周辺は、環濠北部エリアとよばれています。昭和20年（1945）の堺大空襲の被害を奇跡的に免れた地区で、古い建物がよく残っています。エリアを南北に貫く紀州街道沿いには、大坂の陣で徳川方に協力した芝辻2家、榎並3家の五鍛冶（後に三鍛冶となる）が、屋敷を構えていました。

鉄炮の製造は、それら五鍛冶を中心に平鍛冶とよばれる鉄炮鍛冶や部品を製造する金具師・象眼師等の下職^{したしよく}が集住し、効率的に高品質な鉄炮を供給する分業体制^{いのうえせき えもん けじゆうたく}がとられていました。

「井上関右衛門家住宅」は、江戸時代の鉄炮鍛冶の生産現場と住宅が残る唯一の建物として歴史的価値が高いことから、堺市の有形文化財（建造物）に指定されています。

平成30年（2018）に井上関右衛門家の前当主、故井上修一氏のご厚志で、主屋と座敷棟を寄附していただき、建物の保存修理工事等を行いました。そして、本年（令和6年・2024）3月3日から文化財公開施設として一般公開しています。



てっぽう かじやしき
鉄炮鍛冶屋敷外観

2 井上関右衛門家資料について

家伝によると、井上家の先祖は天正年間（1573～92）から加藤家（後の伊予国大洲藩主）に仕え、慶長15年（1610）頃に井上八兵衛が堺へ来て鉄炮鍛冶になったとされています。その息子が承応2年（1653）に大洲藩2代藩主の加藤泰興から「関右衛門」の名を賜ったことで、鉄炮鍛冶井上関右衛門家が誕生しました。

屋敷内の資料調査は平成26年（2014）10月から始まり、主屋の2階や道具蔵等に数多くの資料が残されていることが明らかになりました。特に江戸時代から近代まで約270年の間に記録された2万点をこえる膨大な古文書が見つかり、関西大学と共同で調査分析を行いました。これまで、江戸時代の鉄炮産業は、鎖国下で泰平の世の中となったため注文数が減少して斜陽化したというのが通説でしたが、井上家資料を分析した結果、井上関右衛門家は、大洲藩を中心に御三家の水戸藩や全国の大名家を相手に取引を行い、鉄炮の受注数を逆に増加させていったことが明らかになったのです。そのことは、注文を受けた大名家の家紋が入った絵符が井上関右衛門家に残されていることからもうかがえます。



みせの間の展示の様子。左上に絵符のレプリカ

3 施設と展示の概要

井上関右衛門家住宅は、表口17間半、奥行15間2尺6寸の敷地で、主屋に隣接して座敷棟、敷地奥に道具蔵、俵倉、附属棟等が建ち並びます。

ご来館の際は、江戸時代にも来客用であった「式台玄関」からお入りいただきます。隣の土間は、部品を組み立てて鉄炮を完成させる「仕上場」です。仕上場は無料ゾーンで、井上関右衛門の語りで堺の鉄炮鍛冶や井上家の歴史を学ぶ「堺 鉄炮話譚」の映像や、鉄炮にちなんだオリジナルグッズを販売するミュージアムグッズコーナーがあり、楽しみながら鉄炮の歴史に触れることができます。仕上場の一面には、国内でも珍しい火縄銃の分解展示と分業の解説があり、環濠北部エリアが「江戸時代の工場団地」であったことを実感できます。



大型展示ケースによる火縄銃の分解展示

主屋では、鉄炮図面や武家取引、下職に関連する文書といった代表的な資料の実物を展示しています。そのうち「みせの間」は、鉄炮取引等の商談をしていた空間で、帳場の様子を再現しています。

また、常設展示に加えて、年2回程度様々な角度から井上家資料にアプローチする企画展を行っています。7月31日から10月28日まで、第1回企画展「青龍鉾人形のめざめー200年の時を超えてー」を開催しています。江戸時代の堺には、祇園祭の山鉾のような祭礼鉾があり、堺南「庄」の氏神である開口神社の「大小路鉾」は知られている一方、堺北「庄」の氏神である菅原神社八朔祭の祭礼鉾の実物は知られていませんでした。井上関右衛門家の資料調査の中で、青龍鉾本体の部材、豪華な幕類、鉾頭、そして青龍鉾人形等が発見されました。それらは、井上家が旧中浜一丁目の町年寄を務めた結果、町の資料が残されたことや、環濠北部エリアが戦災を免れたことといった様々な奇跡の末に残された貴重な資料です。今回の企画展では初公開の青龍鉾関係資料14点を展示しています。



企画展で展示している青龍鉾人形

敷地の一番奥には、家相図によると鍛冶場があったことがわかっていましたが、建物は残っていませんでした。明治時代の図面をもとに、新築したのが現在の「鍛冶場」です。ここでは、発掘調査成果や近隣の鍛冶工房を参考に再現した鍛冶炉や井上家に伝わるフィゴ等を展示し、銃身の製造過程を動画と資料で紹介しています。その奥では、鉄炮鍛冶の親方の説明を聞きながら、フィゴで風を送って温度を上げ、鉾で鉄を鍛錬する鍛冶職人の仕事を体験できるコーナーも設けており、子供たちでも楽しみながら「本物のものづくり空間」を体感できます。多くの方のご来館をお待ちしています。



鍛冶場の再現展示

鉄炮鍛冶屋敷（堺市立町家歴史館井上関右衛門家住宅）
〒590-0928 堺市堺区北旅籠町西1丁3-22
開館時間：10:00～17:00（最終入館16:30）
休館日：火曜日、年末年始 入館料：一般500円
HP：<https://www.sakai-machiyamuseums.com/>

堺市文化財課学芸員

追われる来訪神

黒 田 一 充

ユネスコの無形文化遺産に、「来訪神」が登録されている。「正月などに家々を訪れ、新たな年を迎えるに当たって怠け者を戒めたり、人々に幸や福をもたらしたりする年中行事」として10件が登録されているが、これらは全国各地に伝わる来訪神儀礼のほんの一部にすぎない。一般に来訪神は、幸福をもたらすとされるため歓迎されることが多いが、そうではない事例もある。

京都府宇治市の6月8日の大幣^{たいへい}神事では、先端に傘を付けた松の枝を3本、紙垂^{しで}を垂らした棚の上に立てた全長約3メートルの大幣^{たいへい}（図1）を中心にした行列が、宇治郷を囲む道を三角形に一周する。神事では、町の四隅の路上に供物を捧^{たか}げて町に入ろうとする悪疫や災厄を防ぐ道饗^{みちあえ}祭^{まつり}の祝詞を読むことから、地区内の災厄を外へ追い出す祭りだとされている。

一行は縣^{あがた}神社の大幣殿から縣通りを北上し、宇治橋西詰で神事後、左折して新町通を南西に進み、一ノ坂で左折して本町通を東進して大幣殿の前に戻る。ここで、大幣を地面に倒して3回廻した後、宇治橋まで引きずって走り、橋の上から川へ投げ入れる（図2）。

行列には、大幣の後ろを四手笠をかぶって頭部が見えない人物が馬に乗って続く。一ノ坂では、3回馬で駆け上がる儀礼をする。大幣殿に戻ると、大幣とともに宇治橋へ駆けて行き、四手笠を川に捨てる。

この人物は、御方^{みかたしろ}とよばれる（図3）が、



図1 宇治大幣神事の大幣（2024年撮影）



図2 宇治川へ投げ入れられる大幣

形代^{かたしろ}は、大被^{おおはらえ}などで人の姿に紙を切り出し、身体をなでたり息を吹きかけたりしてから身代わりとして川や海に流すものである。

『兎道旧記浜千鳥』（元禄10年・1697）には、大幣を倒した後、御方が馬を駆けて公文所前で四手笠を取り、大幣とともに宇治橋の下流にあった橋ノ小嶋前で流したとある。馬を駆けた際には、「此時諸人声ヲ立テ追遂去古実有り」という口伝があったことを記している。御方は大幣と同様に宇治郷の災厄などを引き受ける存在であったことから、人びとから追い払われたのだろう。

愛知県稲沢市の尾張大國霊神社（国府宮）では、旧正月13日午後に、はだか祭が行われる。参道にふんどし姿で集まった大勢の男たちの中に神男^{しんおとこ}が入って境内の饊^な追殿^{おいでん}へ進んで行くが、触れば厄を落とせるといので、男たちが神男に殺到する。この祭りは正式には「饊追神



図3 大幣神事の御方



図4 『尾張名所図会』後編巻2（夜難負の神事）
国立国会図書館デジタルコレクションより

事」とよばれ、神男も正式にはなおいにん 雛負人という。災厄を背負っていくのが、その役割である。

はだか祭の後、14日未明に夜雛追神事が行われる。神男は災厄をおおなるすず 搗きこんだ土餅を背負い、後ろから神職が大鳴鈴を振り鳴らして境内から追い立てる。境外に出ると餅は捨てられ、神職によってその場所に穴を掘って埋められる。その際、境内にいた人びとは、柳と桃の枝を紙で包んだつぶて 礫を神男に投げ付ける。礫は集めてすぐに燃やし、その灰は翌年の土餅を搗く際に混ぜる。

『尾張名所図会』（明治13年・1880）の夜雛追の神事の図（図4）には、背負った土餅に人形を突き立て、人形の手と髪に紙燭を灯した雛負人に神職たちが草人形を投げ打ち、刀を抜いて追いかける姿が描かれている。別に雛追捕神事の図もあり、昼間に神職たちが集団で雛負人となる人物を捕まえに行く場面が描かれている。さらに、寛保4年（1744）に藩主から禁止され、人を雇うようになるまでは、旅人を捕まえてこの役をさせていたと記されている。

大阪市住吉大社では、旧暦6月晦日（現在8月1日）の住吉祭に堺の宿院頓宮へ神輿の渡御があり、あらにこのおおはらえ 荒和大祓神事が行われる。17世紀には「住吉祭礼図屏風」が多数制作され、この行列の様子が描かれている。その中に、頭に植物の冠をかぶり、馬に乗った人物が描かれているものがある。現在確認されているのは3作品で、図5はサンフランシスコのアジア美術館所蔵の屏風に描かれているものである。

『住吉松葉大記』に、平野郷から奉仕したアハラヤ（阿波羅耶・阿播良耶）の記事があり、14、5歳の童形の者から神輿で2人を選ぶ。役に

当たった者は荒薦に座して精進潔斎し、神事には黒衣に華笠をかぶって馬に乗り、神輿に供奉した。彼らが、堺に着いたときには、「輩二三百人従りごうごう 囂々ノ声街ニ満ツ」と記され、群衆から騒々しい声があがったという。

住吉祭の中心となる儀礼が荒和大祓という祓いの行事であることから、アハラヤは御方と同様、祓いの対象、祓いを象徴する人物と考えられる。14、5歳は当時の元服直前であり、災厄を託す存在のため、童児ではなく成人に近い者がつとめたのであろう。

屏風に描かれている作品が少ないのは、寛文年間（1661～73年）に、アハラヤの奉仕が中断したからである。その後、享保8年（1723）に再興された後は童児に代わってちこね 児禰宜とよばれ、平野郷の代表として神輿のお供をするだけの役割となった。その後、人数もひとりになって中断と再興を繰り返し、明治のはじめまで渡御行列に奉仕した。

神に悪口を浴びせる例として、京都市右京区太秦蜂岡町の広隆寺で10月12日（もとは旧9月）に行われる牛祭がある。明治の初めまで境内に祀られていた大酒神社の祭りで、紙で作った奇妙な顔の白いお面と冠をかぶった摩多羅神が御幣を持ち、雄牛の背に乗って登場する（図6）。青鬼・赤鬼のお面で矛を手にした四天王が前後を警護し、囃子や松明などと一緒に寺の周囲を練り歩き、境内の薬師堂前に設けた祭壇に上がる。

摩多羅神は中国から勧請された神で、源信（恵心僧都）が広隆寺でしょうみょう 唱名念仏会を修した際にこの神がようごう 影向したので、祭文を記したのが



図5 「住吉祭礼図屏風」に描かれたアハラヤ

Festival of Sumiyoshi Shrine, Approx. 1600–1650. Japan. Ink, colors and gold on paper. Asian Art Museum of San Francisco, Transfer from the Fine Arts Museums of San Francisco, Gift of Mrs. Herbert Fleishhacker, B69D57. Photograph © Asian Art Museum of San Francisco.

この祭りの始まりだという。祭壇に座った摩多羅神は独特の節回しで祭文を読み、四天王が唱和する。約1時間かかりで読み終わるやいなや、摩多羅神と四天王は薬師堂の中に駆け込み、ただちにお堂の扉が閉められて祭りが終わる。

この祭文を読み上げる間は、「もうひとつ」とか「御粥腹（腹に力が入っていない）」といった悪口が見物人から浴びせられる。また、薬師堂へ素早く逃げ込むのは、見物人に襲われて面や冠を取られないようにするため、この面を手に入れると災厄を逃れるとの伝承がある。祭文には、疫病や寺と田畑に害を与える烏や鼠、モグラを摩多羅神によって払い退くべきとの文面になっており、災厄の除去と関係がある内容である。

祭文に「おどるものもありはねるものあり、偏ひとえに百鬼夜行ひゃっきやぎょうに異ならず」と記されるように、現在のような整然とした行列ではなかったようである。『都名所図会』（安永9年・1780）には、今と異なる鼻高面に冠をかぶった摩多羅神が後向きに牛に乗り、四天王も同じ鼻高面に野菜の作り物を頭に載せて、矛や太鼓と鉦を持って駆け出し、他の人びともそれらを追いかける様子が描かれている。

これらの役は寺僧がつとめていたため、明治はじめの神仏分離で牛祭は中断し、明治20年（1887）に再興された。その際、富岡鉄斎が現在のお面のデザインを考案したとされるが、すでに19世紀前半の絵画には白いお面が描かれていることから検討が必要である。現在牛祭は、牛の調達が困難なことなどから、20年程前から休止している。



図6 図7 広隆寺の牛祭・摩多羅神（1992年撮影）



図8 泥打祭りの代宮司（泥神様）（2018年撮影）

福岡県朝倉市・穂坂阿蘇神社の3月の泥打祭りでは、昼に氏子の人たちが集まって会食し、神闌だいくうじを廻して代宮司を選ぶ。午後に拝殿で宮司や宮役たちが集まって代宮司に酒を飲ませ、酔いがまわると白い神衣に着替えさせる。法被姿の若衆ふたりが両脇を支え、拝殿の階段を下りて、地面に設けた神の座に座らせて、神田の土でこねた泥土を全身に塗りつける。

その後、獅子舞を先頭に神社の石段を下りて行き、集落の中を通過して、西の外れにある道祖神の所まで進んで神懸かりを解く。途中の路上には泥のかたまりが用意され、ウチコとよばれる姉さん被りの児童たちが代宮司に泥土を投げつける（図8）。泥がつけばつくほどその年は豊作になると言われ、代宮司は泥神様ともよばれる。

山から下りて来た田の神を表しているという解釈が一般的であるが、『筑前国続風土記附録』（寛政11年・1799）には、「村中の児輩祠官に水泥を打かくる。祠官あはてて社頭を馳出るを、追かけ打ちらし興する事を祭の例とす」とあり、子どもたちに追われ、水泥を打ちかけられたようである。東にある神社から西の道祖神まで集落内を端から端まで通って行くことから、泥土は集落の災厄を表し、それを投げ付けて集落の外へ追い出しているようにもうかがえる。

来訪神には、集落に幸せをもたらすというプラスの要素を運んで来るものばかりではなく、災厄などを背負って追い出されて行くことによってマイナス要素を取り去るものもあったのである。

関西大学文学部教授

国府遺跡から出土した「刻痕有鹿角器」について (II)

合 田 茂 伸

はじめに

筆者は前稿で、大阪府・国府遺跡出土「刻痕有鹿角器」〔関西大学博物館2010p.49〕は、凸彎部左右の両側部を握り、溝の裏面を背面として作業側に向け、凸彎部の溝部分で対象物に対して溝と平行に加圧・摩擦を繰り返した道具であろう、と推定した〔合田2023pp.10-13〕。前稿提出後、島根県・古浦遺跡出土資料と鳥取県・青谷上寺地遺跡出土資料を観察し、木村幾多郎氏〔木村1987pp.58-59〕、松山友子氏〔松山1989p.113〕が指摘する「擦過痕」を確認したので報告する。これまで、この擦過痕が図、写真で示された報告を知らない。写真は、所有者の許可を得て筆者が撮影した。

1 島根県・古浦遺跡出土鹿角器

(1) 「刀子柄破片(a)」(松江市所蔵・遺物番号図14-1〔藤田2005p.93〕・写真1)

大きさは、現長7.3cm、最大幅2.1cm、最大厚0.9cm。風化が進み白化している。断面「V」字形の溝は、1-2mm間隔で22条あり、幅1.5-2mm、深さ1-7mm、エッジは明瞭である。横断面は多角形に復元できる。表面は長軸方向の面取り状の切削痕が明瞭であり、破断面は鮮鋭であるので、未完成状態で折損、遊離した破片であると考えられる。

(2) 「刀子柄破片(b)」(松江市所蔵・遺物番号図59-3〔藤田2005p.156〕・写真2)

現長8.2cm、最大幅2.6cm。表面は滑らかで、一部に長軸に平行する面取り痕を微かに観察できる。断面略「V」字形の溝は20条。表面は平滑で光沢を放つ。溝のエッジは鮮鋭である。溝内部は光沢がなく溝切削時の状態が維持されているように見える。溝は全周しない。溝の終端は浅く細い。溝が途切れた部分は1面を成し、鹿角表面の凹凸を残して摩滅している。溝のある部分(以下、溝部)の横断面形は滑らかな円弧であるが、裏面は未整形である。溝部に平坦化した箇所があり、摩耗により変形した

箇所と推定する。両端部は切断、折損のため失われている。一方の端部は刃物による階段状の切断痕があり、短ストロークによる切断が複数回にわたる。切断面は少し摩滅している。もう一方の端部は単純な折損である。溝部の一部が剥がれているので、折損部の両側が折れ曲がるように一時に破断したのであろう。破断面は新鮮な状態であるので、折損後には使用されなかったと推定する。撮影画像(写真2右)の照明反射箇所に細い縞状の線(ヘアライン)状の擦痕を観察できる。擦痕は溝に対して約0-15°傾く。この擦痕が木村氏らが指摘した擦過痕であろう。

2 鳥取県・青谷上寺地遺跡出土鹿角器

(1) 「鹿角製柄付鑿」(鳥取県所蔵・遺物番号27〔北浦2001p.154〕・写真3)

鉄棒を嵌工した鹿角製の柄である。柄の長軸に直交して深さ1-1.5mm、幅および間隔2mmの溝が15条彫刻されている。溝の長さは柄元で長く柄尻では短い。柄元と柄尻の両端面以外は摩滅して滑らかで光沢を放つ。溝のエッジが潰れて変形するほど摩滅している。柄元に近いほど摩滅が著しい。(写真3右)

(2) 「刻骨」(鳥取県所蔵・遺物番号230〔北浦2001p.253〕・写真4)

全長17.2cm。両端を筧状に成形し、中央付近に長軸方向の貫通孔がある。溝は14条。溝部表面は著しい摩耗・摩滅状態である。溝部の表面の一部に、溝に平行してヘアライン状の擦痕を観察できる(写真4右・照明反射部)が、中央付近では溝のエッジが鮮鋭さを欠き表面が劣化している。筧状成形部分は、面取り状切削痕が明瞭である。面取状切削は溝部の裏面側に及ぶ。鹿角表面が残る裏面は全体に摩滅しているが、筧状成形部分は切削条痕(カッターマーク)が明瞭に残り摩滅の程度は小さい。切削条痕は肉眼で容易に観察できる平行線状の工具痕で、ヘアライン状の擦痕とは異なる。



写真1 古浦遺跡出土鹿角器(1) [2023年12月9日撮影・松江市長承諾・埋文第486号(令和5年11月28日付)、Nikon D500+AF-S DX Micro NIKKOR 40mm f/2.8G ISO1600 (f/16-1/60), (f/11-1/60)]



写真2 古浦遺跡出土鹿角器(2) [2023年12月9日撮影・松江市長承諾・埋文第486号(令和5年11月28日付)、Nikon D500+AF-S DX Micro NIKKOR 40mm f/2.8G ISO1600 (f/16, 1/60), (f/11, 1/60)]

遺物番号230は、両端を筧状に薄く切削・整形されたうえ貫通孔が穿孔されて、大きな圧力を加える道具には適さない形状であろう。両側部の筧状成形時期は溝部の成形時期の後である可能性がある。現状が他に類を見ない形状であることを考え合わせ、本資料が再利用品（転用品）である可能性を指摘する。

3 大阪府・国府遺跡出土鹿角器（写真5）

上の2遺跡出土鹿角器の観察でヘアライン状の擦痕を確認したため、関西大学博物館が所蔵する国府遺跡出土鹿角器を再観察した。この鹿角器には、中央部の多条の溝とは別に端部にも溝の跡がある。今回、中央部の溝の表面をマイクロ撮影したところ、溝部の表面に溝に平行するヘアライン状の擦痕を観察した（写真5右）。いっぽう、端部の溝は全体に浅く（写真5左下）、溝のエッジも確認できない程度に不

明瞭であり、中央部のそれとは摩滅・摩耗状態が異なる。

4 まとめ

（1）観察の結果

上述の観察では、比較対照として有効な観察結果を得られた。

古浦遺跡出土の鹿角器2点は、筆者が前稿で松山氏の意見〔松山1989〕を追認した同種の鹿角器の製作と使用に伴う破損、再利用、廃棄の過程を示す資料として観察することができた。住居跡出土資料（遺物番号図59-3）においては、溝に0-15°程度斜交するヘアライン状の明瞭な擦痕を観察したこと、左右の切断（折損）状況が異なることから、一方を先に切断したのち左右不均整な状態で使用を継続した、と推定する。採集資料（遺物番号図14-1）には、面取状の切削痕が明瞭であることから未完成状態で



写真3 青谷上寺地遺跡出土鹿角器(1) [2024年2月9日撮影・鳥取県とっとり弥生の王国推進課長承認(令和5年12月28日付) Nikon D850+AF-S Micro NIKKOR 60mm f/2.8G ED ISO1600 (f/22, 1/60)]



写真4 青谷上寺地遺跡出土鹿角器(2) [2024年2月9日撮影・鳥取県とっとり弥生の王国推進課長承認(令和5年12月28日付) Nikon D850+AF-S Micro NIKKOR 60mm f/2.8G ED ISO1600 (f/22, 1/60)、Nikon Z5+NIKKOR Z MC 50mm f/2.8 ISO360 (f22, 1/60)]



写真5 国府遺跡出土鹿角器 [2023年7月11日撮影 Nikon D850+AF-S Micro NIKKOR 60mm f/2.8G ED ISO3200 (f/16, 1/60)、(f/20, 1/60)、2024年2月20日撮影 Nikon Z5+NIKKOR Z MC 50mm f/2.8 ISO220 (f22, 1/60)]

破損して廃棄されたものであると推定する。

青谷上寺地遺跡では、鉄鑿の鹿角柄（遺物番27）と「刻骨」（遺物番号230）との比較観察ができた。溝部表面の摩耗、摩滅状況は両者で異なる。前者は溝のエッジが潰れるように摩滅し、それは柄元に近いほど顕著であった。後者は溝部の中央部の表面は風化しているように見えたが、周辺部の溝の表面は比較的良好に保たれ、溝に平行するヘアライン状の擦痕を観察した。溝の長さは、前者は報告書どおり柄元に近いほど長いことに対して、後者はほぼ同じ長さに揃っている。前者は、押鑿の柄としての摩滅の度合いと溝の長さが相関すると考える。後者は、表面の状態と現在の形状からみて再利用品の可能性を指摘した。

国府遺跡出土鹿角器では、中央部の多条の溝とは別に端部にも溝の跡が残るが、両者は摩滅・摩耗状況がまったく異なる。中央部の溝はエッジが立つように明瞭に残り、溝に平行するヘアライン状の擦痕を観察できたが、端部の溝は全体に浅く不明瞭である、という違いがあった。中央の溝部及びその周辺の表面は光沢を放つ。それには及ばないが、溝の両側や溝の裏側の表面は摩滅して滑らかである。また、溝部は円弧状の横断面形であるが、その裏面や両側の部分は面取の稜線や鹿角表面の凹凸が残る不整形な断面形である。古浦遺跡・遺物番号図59-3、青谷上寺地遺跡・遺物番号230も同様の断面形である。

（2）機能、用途の推定

観察資料〈本文1－（2）、2－（2）、3〉の機能、用途について、前稿と今回の観察を合わせて推定を試みる。ハンドル状の両側部を左右の手で握り、断面を円弧状に整形し多条の溝を彫刻した中央凸彎部の溝部をヘアライン状の擦痕が残るような比較的柔らかで平らな対象物に強く押しつけ、前後に繰り返し強く摩擦することでその表面を平滑化する、という使用法を推定する。たとえば、馬革コードバンのグレージング仕上げ作業のような、堅いもので強く摩擦して繊維を寝かせ表面を平滑化する作業のための道具である可能性を考えている。その押す圧力は、ときに鹿角が折損するような強さであると推定する。この使用法では溝は、現代のプレス・ロー

ラーの「縦溝」と称されるものに近いのではないかと考える。

（3）刻骨という名称

刻み・刻目はノッチのような短ストロークの痕跡を想像しやすい。また、刻骨という遺物名称は、鹿角や獣骨を「刻む」ことに重点が置かれ、かつ、精神性をはらむ名称と感じており適切でないと考える。遺物の形状に即した名称としては、「多条有溝鹿角製品」、「多条有溝骨角器」などが候補となる。

【参考文献】（発行年次順）

- 末永雅雄（編） 1935『本山考古室要録』（本山家蔵版）p.46
木村幾多郎 1987「刻骨」『弥生文化の研究』第8巻（祭りと墓と装い）pp.55-65
松山友子 1989「館収蔵の刻骨について」『黎明館調査研究報告』第3集 鹿児島県歴史資料センター黎明館 pp.105-117
北浦弘人 2001『青谷上寺地遺跡3』（本文編）（鳥取県教育文化財団調査報告書 72 一般国道9号改築工事（青谷・羽合道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター p.154、p.253
藤田 等 2005「第7章 遺構と遺物」p.93「骨角器」、p.156「A区住居跡一工房？―出土骨角器」『古浦遺跡』古浦遺跡調査研究会・鹿島町教育委員会
関西大学博物館（編） 2010『関西大学博物館蔵 本山彦一蒐集資料目録』p.49
合田茂伸 2023「国府遺跡から出土した『刻痕有鹿角器』について」『阡陵 関西大学博物館報』No.87 pp.10-13

（補記） 本稿は、兵庫考古学談話会第45回例会（2024年2月25日）において口頭発表した内容を骨子とする。荒田敬介氏には発表の機会を恵みいただいた。席上で千種浩氏、柴田将幹氏、西岡誠司氏より御教示をいただいた。西川卓志氏には書面で、山口卓也氏からは口頭で御教示をいただいた。資料の特別利用では、鳥取県・濱田竜彦氏、岡野雅則氏、湯村功氏、松江市・三宅和子氏、前田詞子氏、赤澤秀則氏、丹羽野輝子氏、笠井今日子氏の御高配があった。関西大学博物館所蔵資料の観察に際して今井真由美氏の協力があつた。各位の御芳名を記して感謝の意とする。

*前稿〔合田2023〕の字句の訂正：『阡陵』No.87-p.11-左列-12行、（誤）「直行」→（正）「直交」

関西大学博物館 学芸員

山岡順太郎宛長塚節書簡の紹介（上）

佐藤健太郎

関西大学総理事兼第11代学長をつとめた山岡順太郎（1866～1928）とその長男で北陽商業学校（現・関西大学北陽高等学校）設立者の山岡倭（1890～1939）旧蔵の山岡家文書のなかに、茨城県出身の歌人、小説家である長塚節（1879～1915）から山岡順太郎に宛てた書簡5点〔①1912（明治45）年7月26日②1912（大正元）年8月7日③1912（大正元）年9月21日④1913（大正2）年3月27日⑤1913（大正2）年4月20日〕を確認した。いずれも旅先より長塚が乗船券を用意してくれた、当時大阪商船株式会社内航部長であった山岡順太郎に送ったものである。今回は5点のうち1912年の書簡3点を紹介したい。

1 1912（明治45・大正元）年の旅行の概要

3月16日、上京。19日、京都に向けて出発。25日、京都帝国大学医科大学附属医院にて和辻春次博士の診察を受け、26日に入院し、27日、手術。4月10日、退院し、京都周辺の社寺を巡る。20日、福岡に向けて出発。24日、九州帝国大学医科大学附属医院にて久保猪之吉博士の診察を受ける。25日、福岡を発ち九州南部を巡り、5月7日に久保の診察を受け、その後九州北部を巡遊。7月5日、福岡を発ち、帰郷の途に就く。途次、各地の社寺を訪れる。9月15日、東京に到着し、26日に帰宅。次に紹介する3点は、いずれも帰郷の途次に出されたものである。

2 書簡の紹介

①1912（明治45）年7月26日書簡

拝啓、過日は私へ対し特に瀬戸内海航路の乗船券御恵贈被成下、御厚志の程難有奉存候、唯今病中之身とてすべて意の如くならず、其後療養のため久しく福岡に逗留、心もとなく存居候処、漸くに自由を得て、今月十九日別府の港を発し、数日間道後の温泉に入浴、昨日高浜より宮島にわたり、音戸を越えて、始めて真の内海の風光に接したるを覚え申候、私は以前より午後海、殊に夕陽の光に照さ

れたる少時間の海を好み申候、朝の水は泥水の如く溷濁して相見え申候へ共、夕陽の海は玲瓏として透徹せるを見申候、今日も雨にて折角の勝地に失望致候処、四時頃雨やみ空の色も少しく相見え申候に付、弥山と申す此島の頂上に登り申候に、滑かなる海上に点々散在せる白帆の眩きばかりに夕日に輝きたるなど、島々を翠と相映じて恍惚たらざるを得ず候ひき、天然と人工と相俟つて、宮島は三景中之第一と存じ申候、成相山の中腹より下瞰する天の橋立も、単に風光の上よりすれば俄に是非を判じ難く候へ共、人工の極致を尽したること此が如きものは、彼には其一端をも発見し難く、松島の瑞巖寺も稀薄なる東北の野には頗る見るべ（「き」脱カ）ものなれども、到底此島のものに比肩すべからず、しかも宮島にして平家に関するものを除却する時は、恐らく大半を減ずべきを思ふ時、清盛以下の遺業の大なるに敬服せざるを得ず申候、生きて宮島を見ることを得ざるは不幸なるもの、一に数へ申度存じ候、

明日、尾の道へ志し、重ねて内海の景勝を貪り申度心得に有之候、衷心喜悦に堪へず申候まゝ、余事ながら右書き記し申進候、とくに御礼可申上筈に候へ共、思ひながら遂延引仕り候、不悪御ふくみ被下度御願申上候

匆々

七月廿六日

長塚節

山岡様 侍史

長塚は、山岡から贈られた乗船券を使用し伊予高浜から海路で宮島を訪れた。長塚は宮島を大変気に入る、日本三景のうち宮島を第一とし、生きて宮島を見ることができないのは不幸なるものの一つに数えたいと述べている。

②1912（大正元）年8月7日書簡

拝啓、兼ねて私へあて御恵贈被下候乗船券疾に御返却可申上の処、遂延引仕り申訳も無之候、今日此状へ封入候間、何卒御受納被下度奉

願上候、

高松まで参り候ては、既に瀬戸内海も遺憾なき処に有之候べく、途中尾の道に上陸して、古刹浄土寺の多宝塔を見ることを得たるが如きは、洵に思ひ設けぬ処と心中の喜悦禁ぜざるもの有之候ひき、瀬戸内海の航路は私の生涯に於て忘れ難き記念を印し申候こと、かさねがさね御礼申進め度、乍略儀如此に御座候、追而、帰途は大阪を通過可仕候へば、自然親しく御礼可申上筈に候へども、時間の都合等にて欠礼仕ることも有之申すべくと、其節は不悪御許容被下度奉願上候

匆々

八月七日

長塚節

山岡様 侍史

長塚は宮島から尾道に向かい、ついで大三島に渡る。尾道に戻り浄土寺多宝塔を見た。そして高松に移る。山岡に乗船券を返却するのにあたり、大阪に立ち寄る予定であり、お目にかかりお礼を申し上げたいと伝えつつも、都合によっては欠礼する可能性も述べる。

③1912（大正元）年9月21日書簡

拝啓、私こと途中格別に段取り候て、去る十五日帰京仕り候、高松へあて、御送り被下候玉章漸く拝受仕り候、消印を見れば、丁度高松を出立致候日に配達相成候もの、如く相見え、遺憾に存じ申候、

書中或は私を御待受被下候かとも推察せられ候故猶以て恐懼致申候、実有途上のことも親しく申上候て、御礼のしるし可仕筈には候へ共、当時事情ありて奈良までは急ぎ不申ては不相成様心もせはしく候ひしたため、御厚志に対して遂疎略に相構ひ申候段、今更汗顔の

次第に有之候、京都へ参り、それより滋賀・岐阜・愛知の三県にて旧知の意外なる同情もだし難く、思はぬ日数を費し申候、今にして思へば、彼の玉翰高松出立の際なりと落手相叶ひ候ひしならば、如何にか都合も致可申候ひしを悔いて及び不申候、

それにしても一昨日千葉県神崎に寺田憲氏を相訪ね候処御噂も出て申候て、猶更御目にかゝらざりしを嘆ぜられ候へ共、同氏にも私の勧誘によりては、一兩年の内に西遊を決行せられ可申、都合によりては御同行など相叶ひ可申かと空なる望も繋かれ申候ことに有之候、御挨拶の致し様も無之、只右のみ申進め候

匆々

九月廿一日

長塚節

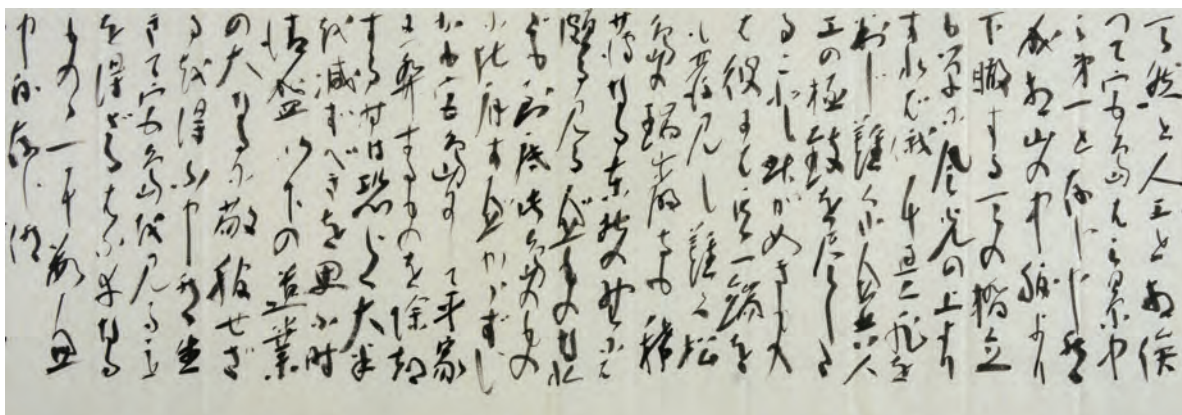
山岡様 侍史

8月10日、長塚は高松を発ち、岡山、姫路、和歌山、奈良、京都、大垣、名古屋、岡崎などを経て、9月15日、東京に到着。②によれば、長塚は、大阪で山岡と面会する予定であったが、③によると、大阪に立ち寄らず和歌山に向かった。また、長塚が高松を出発した後に、山岡より書簡が届いたようである。それは②に対する返信で、面会に関することなどが書かれていたのだろう。

9月19日に長岡は千葉県神崎の寺田憲のもとを訪ねている。寺田との間で山岡の噂が出たことを記しているのは、山岡と寺田との関係性を考える上で興味深い。長塚は、自分の勧誘によって寺田が一兩年の内に西遊する可能性を山岡に伝え、筆を擱いている。

関西大学博物館事務室年史編纂室 学芸員

※翻刻にあたり、読みやすいように読点を適宜補い、踊り字などの表記を改めた箇所がある。



① 1912（明治 45）年 7 月 26 日書簡（部分）

◆ 博物館だより

◇2023 年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	25	25	27	26	4	13	25	24	21	19	17	17	243
入館者数	1,106	1,337	965	955	1,749	187	729	966	224	304	515	416	9,453

◇関西大学文学部創設 100 周年・関西大学博物館開設 30 周年記念連携企画展「花開く大阪の文化」を開催

2024 年 4 月 7 日から 5 月 31 日にかけて開催し、会期中には 2,569 名にご来場いただきました。連携企画展に関連した講演会、4 月 19 日「百舌鳥・古市古墳群の調査・研究の歩み」(講師 本学文学部教授 井上主税氏)、4 月 27 日「大坂の古典学 契沖・宣長から岩崎美隆へ」(講師 本学文学部教授 乾善彦氏)を開催し、2 回の講演会で合わせて 86 名にご参加いただきました。



◇今年度も資料の取扱いを実践的に学ぶ「博物館実習実践研修会」を開催しました。

6 月 22 日に河内國平氏・河内晋平氏・高見國一氏による日本刀研修を実施し、17 名にご参加いただきました。

◇2024 年度夏季企画展「関西大学美術部白鷺会創部 100 周年記念 関西大学の美術家たち」を開催

2024 年 6 月 24 日から 7 月 26 日にかけて開催し、会期中には 930 名にご来場いただきました。

◇夏の恒例行事「キッズミュージアム」は、少数での講座形式として 8 月 1 日・2 日に実施しました。

「縄文タイルをつくろう」「扇子に絵を描こう」「拓本をとろう」「埴輪をつくろう」の 4 つの講座を行い、抽選で選ばれた約 80 名の小学生が参加しました。

◇この度、本学校友の糸見友宏氏から古い名品の硯を集めた大型図版『古名硯』ほか貴重な書籍計 14 点をご寄贈いただきました。今後博物館で充分活用していきたいと考えています。

・ ・ ・ 編集後記 ・ ・ ・

2024 年、関西大学博物館は開設 30 周年を迎えました。4 月 1 日をもって、なにわ大阪研究センターは関西大学博物館へ移管、組織統合され、林武文総合情報学部教授が博物館副館長に就任いたしました。現館長同様、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

なにわ大阪研究センターは、「なにわ大阪を中心とした地域研究の拠点形成」と「地域研究を通じての地域連携・地域貢献」を使命とし、本学創立 130 周年記念事業の一つとして 2016 年に設立されました。

関西大学博物館と統合することで、学術資源の共有や情報発信の増強など、「大学博物館」としての充実を進めたいと考えています。

表紙「有孔中空土製品」は、当館所蔵本山彦一蒐集資料に含まれる考古学資料です。従来、(左：MY-S_0515)「土版 陸中國和賀郡更木村更木^①」・「亀甲形土版 岩手県北上市更木町(臥牛遺跡)出土^②」、(右：MY-S_0519)「土版 陸中國岩手郡御所村鶯宿^①」・「亀甲形土版 岩手県岩手郡雫石町(鶯宿)出土^②」と登録されています。近時、再観察を行い、いずれも土版ではなく東北地方の縄文時代晩期に特有の中空土製品の一部であることを確認しました。近似例として、岩手県・黒内 XIII 遺跡出土「甲虫状土製品^③」があります。



〔文献〕①末永雅雄編 1935『石器時代－土偶・土版』『本山考古室要録』p.55、②関西大学博物館 2010『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』p.59、③高橋正之 1994『黒内 VIII・黒内 XIII 遺跡発掘調査報告書』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 208 集)(財)岩手県文化事業団埋蔵文化財センター 口絵 2、p.416